

# 【主論文の要約】

## センター試験・SAT・AP 試験「世界史」で測定される

### 歴史的知識と歴史的思考力

中切正人

#### 1. 本研究の目的と本論文の構成

本研究は、高大接続に関わるわが国の大学入試センター試験（以下センター試験と表記）「世界史」と、アメリカのSAT（Scholastic Assessment Test：以下SATと表記）科目別テスト「世界史」およびアドヴァンスト・プレイズメント・プログラム（Advanced Placement Program：以下APと表記）試験「世界史」で測定されている、「歴史的知識の質」と「歴史的思考力や技能」を比較し、日米の試験で測定されている学力の特色を明らかにすることを目的とした。そして、その分析結果を補強し、その背景的理解を深めるために、AP「世界史」コース（カリキュラム相当）と試験で育成かつ測定されている学力の全体像を示し、わが国の「世界史」教育で育成かつ測定されている学力と対比した。

本論文の構成は以下の通りである。最初にその目次を示す。

<目次>\*\*\*\*\*

序 章 大学入試で測定される歴史的知識と歴史的思考力

0.1. 本研究の背景と意義

0.2. わが国の高等学校「世界史」教育の培う学力

0.3. 中等「歴史教育」を取り巻く歴史的知識と歴史的思考力

0.4. 本研究の分析対象と分析方法

0.5. 本研究の目的

0.6. 本論文の構成

第1章 試験で測定される歴史的知識と歴史的思考力の研究史

ーセンター試験，SAT，AP 試験「世界史」の先行研究と東西の歴史文化的背景ー

- 1.1.わが国のセンター試験「世界史」と中等「歴史教育」に関わる先行研究
- 1.2.アメリカのSAT 科目別テスト「世界史」の先行研究
- 1.3. アメリカのAP 試験「世界史」の先行研究とAP プログラムの概要

## 第2章 高大接続に関わる試験の時空間分析

- 2.1.本章の分析視角：時間軸と空間軸を通して見る大学「入学試験」
- 2.2.時間軸を通して見るわが国の「入学試験」
- 2.3.空間軸を通して見る「高大接続」試験
- 2.4.大学入試の「時空間分析」を通して見えてくるもの

## 第3章 センター試験・SAT・AP 試験「世界史」で測定される学力の分析方法と分析結果

- 3.1. センター試験・SAT・AP 試験「世界史」で測定される学力の分析方法
- 3.2. センター試験・SAT 科目別テスト・AP 試験「世界史」の分析

## 第4章 センター試験・SAT・AP 試験「世界史」で測定される学力の考察

- 4.1. センター試験とSAT 科目別テスト「世界史」で測定される学力の比較分析
- 4.2.AP 試験「世界史」で測定される学力の考察
- 4.3. センター試験・SAT・AP 試験「世界史」で測定される学力の考察

## 第5章 AP「世界史」コースとAP 試験「世界史」の分析

- 5.1.AP「世界史」コースとAP 試験「世界史」の分析対象と分析方法
- 5.2.AP「世界史」コースの「カリキュラムの枠組み」の分析

## 第6章 AP「世界史」コースとAP 試験「世界史」の総合的考察

- 6.1.AP 試験「世界史」の多肢選択部で測定される歴史的知識の質の考察
- 6.2.AP 試験「世界史」で測定される歴史的知識の質と歴史的思考力の総合的考察
- 6.3.日米の中等「歴史教育」とAP「世界史」コースにおける歴史的思考力の定義

## 終章 本研究の結論と今後の課題

- 7.1.本研究の結論と今後の課題
- 7.2.本研究から導かれる視点

### 【脚注】

### 【引用文献】

### 【付録】

\*\*\*\*\*

第1章は先行研究の分析である。ここでは、わが国の歴史教育において、主にセンター試験「世

世界史」を中心とした大学入試や、試験で測定される歴史的知識と歴史的思考力について研究されてきた内容を概観し、これまで歴史的知識の質と歴史的思考力や技能の構成要素について明らかにされてきた研究成果を整理した。さらに、本研究が分析対象とするセンター試験と同じ多肢選択式で高大接続に関わる試験が行われている、アメリカのSAT科目別テスト「世界史」およびAP試験「世界史」に関わるわが国のこれまでの研究成果を取り上げた。なお、これらの二つの試験については、その母体となっているSATとAPプログラムを含めて先行研究が少ないことから、それぞれの母体の概要を示した上で、そこにそれぞれの「世界史」試験を位置づける作業を行った。

また、第1章では、東洋と西洋の間の歴史観や歴史学の相違、あるいは歴史教育で育成され、試験で測定される歴史的知識と歴史的思考力について考究されてきた論考を取り上げ、わが国の後期中等「歴史教育」で育成され、試験で測定されている学力の歴史文化的背景を分析した。これは、この章で分析された先行研究を高所より俯瞰し、本研究の分析対象である、高大接続において育成・測定されている歴史的知識の質および歴史的思考力や技能を再認識するメタ認知的作業である。

第2章では、知識基盤社会と後期中等「歴史教育」との整合性に注目しながら、大学入試・センター試験の「時空間分析」を行った。ここでは、明治以降今日のセンター試験に至るわが国の大学入試が高大接続に占めてきた位置を歴史的に跡付け、また、国際的視野に立ってヨーロッパ（フランス：バカロレア）とアメリカ（SAT, AP）の高大接続に関わる試験制度とセンター試験制度を比較する中で、センター試験制度の特色を浮き彫りにした。そして、そこで得られた知見を第3章以降の考察に加えて、試験制度の違いが試験で測定される学力に及ぼす影響について考察する際の資料を提供し、本研究の知見に深みを与える基礎的資料を準備した。

第3章から、本研究の第一の分析対象の分析を始めた。ここでは三つの試験、すなわち、センター試験・SAT科目別テスト・AP試験「世界史」について、先行研究で明らかにされた成果と課題を指摘した後、その課題の解決を含めた上で、試験で測定される歴史的知識の質と歴史的思考力や技能を分析する方法について具体例を交えながら明らかにした。その後、三つの試験の設問を一つずつ分析してコーディングしたが、その際の分析基準を具体例で明らかにすると同時に、その分析過程も明示した。そして、三つの試験の分析結果を計量的に明らかにした資料・グラフを提示した。

第4章では、第3章の分析結果について考察した。まず、三つの試験の測定する歴史的知識の質および歴史的思考力や技能の相違点を明らかにした上で、そこに第2章で得られた知見、すなわち、フランスのバカロレアとアメリカのSAT・AP試験とわが国のセンター試験との相違点を関連させて、三つの試験が測定する学力の特色を抽出して比較・考察した。そして、センター試験「世界史」とAP試験「世界史」に見られる対照性は、(1)日米の試験問題の「公開もしくは非公開制度」、(2)

各試験の設問の「妥当性と信頼性」および「正解の多義性の内包と一義性の重視」との関係、(3) 日米の複数の教科書に記された「歴史的知識の質」の相違、に関わるものであることを示した。

第5章では、前章までに明らかになった AP 試験「世界史」で測定される歴史的知識の質と歴史的思考力の背景的理解を探るために、試験と密接なつながりを持つ AP「世界史」コースの分析を行った。ここでは、これまでその全体像が明らかにされてこなかった AP「世界史」コースと AP 試験「世界史」の概要を示した後、AP「世界史」コースで育成されている歴史的知識の内容と歴史的思考力の構成要素を具体的に挙げて分析を加えた。

第6章では、第5章の分析結果について考察した。最初に、2011年 AP 模擬試験「世界史」の多肢選択部の設問に反映されている歴史的思考力の構成要素を確認し、次に、わが国の『高等学校学習指導要領解説地理歴史編』と「世界史」教科書、および、AP「世界史」コースのハンドブックと AP「世界史」教科書を分析対象として、そこに見られる歴史的知識の質や歴史的思考力に分析を加えた。そして、2010年 AP 本試験「世界史」の論述部の設問分析を通して、そこに活用されている歴史的思考力の構成要素や歴史的知識の質を検証した上で、最終的に、AP「世界史」コースで育成され AP 試験「世界史」で測定されている、歴史的知識の質と歴史的思考力の構成要素との相互関係について総合的に考察した。

なお、AP「世界史」コースの歴史的思考力の構成要素については、これをわが国の日本学術会議(2011)と、アメリカ初等中等「歴史教育」の「歴史基準: History Standards」とを三角測量的に比較することによって、わが国と AP「世界史」コースが育成する歴史的思考力の特色を明確にする資料を補足した。

終章では、以上の分析結果と考察を整理し、本研究の目的がどこまで明らかになったか示した。そして、そこから導かれる本研究の限界を示すと同時に、今後の新たな研究課題を提示した。最後に、本研究の知見を今後どのように生かすことができるか考察した。

## **2. 本研究の背景と分析対象・分析方法**

グローバル化する知識基盤社会 (knowledge-based society) における知識は、周囲に共有されながら学際的な課題解決を志向して新たな知見を生み出す動的な広義の知識 (OECD, 2008) や「新しい能力」(松下, 2010) であり、その中には「歴史的思考力」が含まれる(『高等学校学習指導要領解説地理歴史編』)。しかし、日本学術会議(2011)によると、わが国の後期中等「歴史教育」では、車の両輪として「歴史的知識の伝達」と「歴史的思考力の育成」が進められるべきところが前者に偏重し、大学入試では静態的な狭義の知識を問う傾向が強いことから、高校では教科書叙述の

丸暗記が助長され、センター試験のマークシート方式では歴史的思考力を問うような出題は困難であるとされている。

大学入試とほぼ同義のセンター試験で測定される学力に関わる先行研究を分析した結果、「多肢選択式試験で測定可能な歴史的知識の質および歴史的思考力や技能の分析<第一の課題>」が不十分であり、その分析の枠組みとして「歴史的思考力や技能の定義および構造が不明瞭<第二の課題>」な上に、「センター試験『世界史』の各設問で測定されている学力の明示<第三の課題>」がなされていない。よって、本研究の分析対象は、「第一の課題」と「第三の課題」を合わせた、「センター試験『世界史』を含む多肢選択式の大学入試で測定可能な歴史的知識の質および歴史的思考力や技能」となったが、わが国の多肢選択式試験では抽象度の高い歴史的知識、および、歴史的思考力や技能がほとんど測定されていないことから、アメリカで高大接続に関わる試験として多肢選択式で実施されている SAT 科目別テストと AP 試験「世界史」を比較分析の対象に加えた。そして、分析に当たっては、試験で測定される「歴史的知識の質」と「歴史的思考力や技能<第二の課題>」を明らかにした分析軸を設定し、この二本の分析軸が構成するマトリクスの中に三つの試験の各設問を1つ1つコーディングすることによって、三つの試験が位置付けられる象限を検証した。

### **3. センター試験・SAT・AP 試験「世界史」で測定されている学力の特色**

センター試験は、選抜を目的として一点刻みの点数が合否判定に機能する集団準拠型試験であることから信頼性が最優先される結果、試験形式は主観の入り込みにくい多肢選択式に統一され、さらに、設問では主観的解釈の入り込みやすい資料の活用が控えられると同時に、解釈が挿入されにくい個別的・事實的知識である「一次情動的知識」が測定されている。また、選抜の公平性を確保するために「初出」の試験問題が実施され、試験問題の「完全公開性」によって公正さが担保されている上に、測定される内容は学習指導要領に準拠した一次情動的知識の共通性の高い教科書が支えており、センター試験「世界史」は「試験問題の公開制度」と「設問の信頼性と正解の一義性」と「教科書の一次情動的知識の共通性」とが三位一体となって機能していると考えられる。

これに対してアメリカでは、SAT と AP 試験において、測定する学力が到達目標に達しているかどうか判定する目標準拠型試験が行われ、AP 試験では、設問の信頼性よりも妥当性の方が重視される論述部を含む試験結果がある一定の「段階：スコア」で評価され、多肢選択部では主観的な解釈が挿入されやすい概念的知識である「高次情動的知識」が資料を伴いながら測定され、項目応答理論 IRT に基づいて項目プールに保管されている設問が繰り返し使用されるため「非公開」となっている。その上、20 世紀末まで歴史教育の全米基準が無かったアメリカでは、その抽象性の高さゆ

えに却って共通性が高い高次情報的知識が主に測定されている。つまり、SAT や AP 試験「世界史」では「試験問題の非公開制度」と「設問の妥当性と正解の多義性」と「教科書の高次情報的知識の共通性」とが三位一体となって機能していると考えられるのである。

この日米両国の対照性について、本研究の主題と離れる試験制度（公開・非公開）は脇に置くものの、アメリカの「正解の多義性」を支える要因には目標準拠型試験に伴う「設問の妥当性」以外に何が存在し、そしてそれは「教科書の高次情報的知識の共通性」にどのように関わっているのか分析・考察を進めることが必要であると考えられた。そこで、分析対象を SAT 受検者の 16 倍以上の受験者（188,417 名：2011 年）を集める AP 試験に絞り、分析に当たっては、多肢選択部と配点を折半している論述部で測定されている歴史的思考力に着目しながら、多肢選択部の位置づけを AP「世界史」コース（カリキュラム）と試験を合わせた AP プログラム「世界史」全体の中に位置づけることによって、このプログラムで育成され、かつ測定されている学力を総合的に分析・考察した。その結果は以下の通りである。

第 1 に、AP「世界史」学習が記憶の訓練の場ではなく思考方法や問題解決の場であることが強調されるようになってきた流れに沿って、年度を重ねる毎に高次情報的知識の測定が増加している。第 2 に、論述部では回答された高次情報的知識そのものではなく、それを編集する思考過程の方が重視される評価基準に対応する形で、多肢選択部ではその土台となる高次情報的知識の測定が基本となって、歴史的知識の質に関わる多肢選択部と論述部との相互補完関係が見られる。第 3 に、多肢選択部で資料を活用する技能（思考力）の測定が増加してきた背景には、2012 年から論述部において歴史学の基本「歴史的証拠に基づく歴史的論証」を中核に据える姿勢が明確に打ち出されたことが反映されている。そして、以上の観点が AP「世界史」教科書にも作用し、教科書では歴史的思考力を鍛える素材として多彩な資料が掲載されると同時に高次情報的知識が中心に叙述され、さらに、より高次の情報的知識を理解し、習得する素材として教科書が機能していると考えられるのである。

#### **4. 本研究の結論**

以上より、わが国のセンター試験「世界史」では、歴史的思考力の一部をなす「資料活用の技能」の測定が少なく、一次情報的歴史知識に偏った測定がなされているのに対し、AP 試験「世界史」においては、多様で豊富な資料を用いた「資料活用の技能」の測定に伴って、ほぼ高次情報的知識に偏重した測定がなされているという対照性が確認された。そして、その対照性には、センター試験側の「試験問題の公開制度」と「設問の信頼性と正解の一義性」と「教科書の一次情報的知識の

共通性」の三位一体的機能に対し、AP 試験側の「試験問題の非公開制度」と「設問の妥当性と正解の多義性」と「教科書の高次情動的知識の共通性」の三位一体的機能が析出された。この AP 試験「世界史」の特色は、その母体である AP プログラム「世界史」において、「歴史的知識の質」と「歴史的思考力や技能」が相互補完的關係で歴史教育の両輪として機能し合っている環境から生みだされたものであると考えられる。

しかし、AP 試験で測定されている高次情動的知識は、センター試験が測定する一次情動的知識に比べ、多様な歴史的思考力が機能することに対する裏腹の關係として、解釈や価値判断等が挿入されやすいことから、設問の良否が問われたり、正解の多義性や試験の信頼性の低さが指摘されたりする可能性を避けて通ることが難しいことが検証された。この点で、センター試験の設問のイデオロギー的中立性と、正解の一義性および試験の信頼性の高さは好対照をなしているのである。

#### <引用文献>

松下佳代 (2010) 「<新しい能力>概念と教育」松下佳代編 (2010) 『<新しい能力>は教育を変えるかー学力・リテラシー・コンピテンシーー』ミネルヴァ書房：1-42.

日本学術会議 (心理学・教育学委員会・歴史学委員会・地域研究委員会合同) 高校地理歴史科教育に関する分科会 (2011) 『提言「新しい高校地理・歴史教育の創造ーグローバル化に対応した時空間認識の育成ー」』(平成 23 年 8 月 3 日)

OECD, (2008). *Tertiary Education for the Knowledge Society : Volume1: Special features: Governance, funding, quality*, Paris: OECD.